

「全少」を日本一研究する指導者による提案

# ZENSHOに 挑戦しよう！



養正館館長・渡辺貴斗 第70回



## ヒドウン・カリキュラム (6) 分かった人？「拳手」

前号では、「分かりましたか？」と質問して“返事”させることについて考えました。今号では、“拳手”について考えていきましょう。

### ★拳手させる

「分かった人？」と指導者が明るく笑顔で聞くと、子供たちが元気よく手を挙げます。そこで、「ほとんどの人が分かったようだね。先生の話をよく聞いていますね。それでは、ペアを作って実際に練習してみましょう」となります。指導者は快活で、子供たちもほとんどが積極的に手を挙げている理想的な稽古風景です。

しかしながら、この稽古風景にはいくつか問題点があります。それは、本当は分かっていないのに、みんなに合わせて手を挙げた子が含まれている点です（私は実際、手を挙げた子、一人ひとり、本当に分かっているか詳細に調査したことがあります）。

みんなの目を気にして、もしくは、手を挙げないと先生から叱られるのではないかと思い、無意識に挙げてしまった子が必ず含まれます。ビートたけし氏の「赤信号、みんなで渡れば怖くない」現象です。

### ★分からない子には触れない

また、もう一つの問題点は、手を挙げなかった子が数人いたのに、指導者がこの子たちを放っておいた点です。「話を聞いていなかったヤツが悪い」と考えてもよいのですが、指導者は本当に子供たち全員が話を聞くような工夫をしたのでしょうか？ 分からなかった子を置き去りにして先に進むと、「手

を挙げなかった子たちに先生は何も触れなかった。分からない子がいても、何も問題がないかのようにそのまま稽古が進んでいった」と、子供たち全体に不安感を与えます。分かっている子たちにとっても「次に自分が分からないときは、こんな風に置いていかれるのだろうか。やっぱり、分からない人がいるのに自分たちだけで稽古を進めてしまっているのだろうか？」と罪悪感を感じます。

一方、分からない子たちは「自分たちは見捨てられている。先生は分かっている子たちのことが好きで、僕たちのことは嫌いなんだ」のように投げやりになります。一見、ほのぼのとして見えた稽古風景でしたが、実際の子供たちの心の中は、不安の闇だったのかもしれない。

このように「分かった人？」と拳手させるやり方には、マイナス点が多くあります。小学校で長年教鞭をとり、現在大学でも教えていらっしゃる横藤雅人先生は、「分かった人？」と質問する安易な全体主義を批判されています。

### ★意図していないメッセージ

前回までに、ヒドウン・カリキュラムを5回にわたり紹介してきました。「こちらが意図していないメッセージを、無意識下で無自覚のうちに相手に伝えてしまうこと」ですが、この場面でも、指導者はそんなつもりでなくても、意図したものと異なるメッセージを子供たちに暗に伝えてしまっています。

つまり、「先生は、分かる子だけと、稽古を進め

ていきます」。「分からない人は自分で何とかしてください、先生は知りません」、「分からないくせにウソをついて手を挙げた人は、自己責任なので分かったフリをうまく続けて、あとは自分で何とかしてください」と、子供たちに向かって宣言をしていることになります。もちろん指導者にこのような悪意や意図は全くありませんが、結果的に、子供たちに間違ったメッセージを送っていることになるのです。これもヒドン・カリキュラムの典型例です。

### ★分からない人？

さきほど紹介した横藤先生、また“授業名人”と仰がれている野口芳宏先生らは、「分かった人？」と聞くことに警鐘を鳴らしており、「分からない人？」と質問することを提唱されています。これですと、分かった人だけと授業を進めるのではなく、分からない人にスポットライトを当てることができるので、分からない人を置き去りにして授業が進むことはありません。目からウロコの質問方法です。

私はこの考え方をさらに改変させて、本当に「分からない人」を特定しています。なぜなら「分からない人？」と質問したときに、恥ずかしがって手を挙げない子が必ずいますので、以下のように質問の仕方を変えています。

### ★本当に分かっていない子

まず「分かった人？」と聞きますと大勢手を挙げます。この中には、分かっていないのに手を挙げている子がいますので、“本当は分かっていない子”

をあぶり出します。そこで、「120%分かった人？」、「誰かに教えることもできる人？」などと追加で篩ふるいにかけます。かなりハードルを上げたので、本当は分かっていないのに手を挙げていた子、2～3人が手を下ろします。最終的に手を挙げていないこの子たちが“本当に分かっていない”子たちです。この子たちの目を見て、もう一度説明すると、今度はあっさり簡単に理解します。マンツーマンで目を見て話をしたので、この子たちは話を聞かざるを得なかったのです。最初の全体説明のとき、話を聞いていなかった子たちです。

このようなやり取りは、子供たち全体に「先生は1人も置いていかないんだ」といった安心感を与えます。また、「先生は本気だから、次からはちゃんと聞かなきゃ」と全体を引き締める効果もあります。このように、「一度決めたことは必ず徹底する」という指導者の本気の覚悟が子供たちに伝われば、全員参加型の稽古が遂行できるのです。

#### PROFILE

■渡辺貴斗 TAKATO WATANABE

1968年4月20日生まれ。7歳から父である館長から空手の手ほどきを受ける。児童心理学や成功哲学を研究して子どもたちの「心をつくる」指導法に切り替え、2013年5名、2014年・2015年7名、2016年5名、2017年9名、2018年・2019年5名を全少入賞させ、一道場での全国最多入賞数の記録更新中。道場経営でも、一道場で350名を超える大躍進を続ける。



空手道場 養正館 / 静岡県沼津市本田町 11-12



### 手を挙げづらい！

分かっていないのに挙手した例を本稿ではあげましたが、逆に、分かっているのに手を挙げない子もいます。子供たちにとって、挙手するというのは、かなり抵抗があるようです。誰も手を挙げていない状態で、自分だけ手を挙げると、集団の中でとても目立ちます。まるで、草原の中に1本、木が立っているかのように一気にみんなの注目を集めてしまいます。

そこで、まず全員を立たせます。「100%、本当に分かった人だけ座ってください」というと、座った方が目立たないので、多くの子が座ります。私の道場では、このように、子供たちの反応が悪い、消極的な雰囲気のあるクラスのときは、まず全員立たせて、理解した子を座らせるようにしています。低学年はこちらの質問に元気に答えますが、高学年になると周りの目を気にして、自分だけ集団と違う行動はとらないようにする傾向があります。よって、この方法は高学年に有効です。外部のセミナー

などでも、いったん手を挙げた子が、周りを見てせっかく挙げた手を引っ込めてしまうのをよく見かけます。

道場で、幼稚園児に積極的に発表できるようにさせても、小学校に入学すると急に消極的になってしまう子たちがいます。学校の授業で、「発表したらみんなに馬鹿にされた」、「先生に笑われた」など、手を挙げると恥ずかしい、という負の経験を積んだ子たちです。あんなに明るく元気に返事、挨拶してきた子が、別人のように消極的になってしまうことがあります。道場だけでなく、家庭、学級でも同じ方向で子供たちを見ていくこと、つまり連携していくことが大事だと考えます。

このように、「挙手させる」ことは、それ自体に問題点が多いですので、クラスの雰囲気によっては臨機応変に他の方法に切り替えるなど、複数の引き出しを使いこなす指導の幅が必要になるでしょう。